
妖狐物語

Mg

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖狐物語

【Nコード】

N4370P

【作者名】

Mg

【あらすじ】

——古来から満月の夜には不思議な力が宿ると言われているのはご存知でございませうか。

奉公先からの帰り道。月夜の道で男に道案内を頼まれた主人公。応じてみるも男の様子は何か不自然で——。

(前書き)

歴史的仮名遣いもどきを使用しています。縦書き表示推奨。

古来から満月の夜には不思議な力が宿ると言われているのはご存知でございませうか。なんでも事故が増えるとか何とか。今宵お話いたしますのは明月の夜のちよいと不思議な物語。他では滅多に聞くことは出来ずまい。お聞き逃しのないやう、よくお聞きなさいよ。

当時実家から少し離れた商家に通いながら奉公しておりましたあたくしは、毎朝毎晩ごつごつざらざら脚のもつれる道のりをせっせこ歩いていたのでございます。あの夜の月の、そりゃあもう大層まんまるで大きかったこと。お天道様のやふに照る月の光はあたくしをすつぽり覆い尽くしてしまうやうでした。光は影を鋭利に切り抜き地面に縫い付け、すっかり冷え切った空気はあたくしの臍物を隅から隅まで凍り尽くさんとしております。

早く早く、帰らなければ。

草履の裏をざりざり掠める砂利の粒。風にからから悲鳴を上げる黒々茂った木の葉っぱ。

逃げ逃げや、良からぬことが起こるより前に。

――ぱちり、ぱちり。

乾いた音がどこか後ろの方からいたしました。あたくしは歩みの速度を速めます。

――ぱちりぱちり、ぱちり。

先程よりも、更に近くで。

叫び出したい衝動を抑え、大股で、半ば走るようにその場を離れやうといたしました。

が、しかし。何かが腕にくるりくるりと巻き付いたのです。そのひやり背筋を掠める冷たさは、袖越しにも充分伝わって参りました。

本来ならば悲鳴を上げたところでせう。ひああとかきやああとか。男にあらざる甲高い情けのない悲鳴を上げたところでございませう。ですがその時のあたくしは悲鳴を上げるよりも情けのうございまして。喉に何か餅のやうな粘着質の物が貼りついてしまったきり、ただただひゅーひゅーと隙間風そっくりの音しか出せなくなったのでありました。

隙間風では人の呼吸には到底間に合いませんので、あたくしは肩で息をしておりました。そんな様子を見たのでせう。何かはそっと低い声で言いました。

——案ずるな、危害は与えぬ

その声は赤子をあやす、柔らかなもの。安心こそ与えなかったもののあたくしに冷静さを取り戻させました。ゆっくり、けれどもはつきりと尋ねます。

——かやうな夜分に危害を与えぬとおっしゃいますが、どこにそのやうな保障がございませう。あたくしは先を急いでおりますゆえ、どうかその冷たい手をお離し下さい

——道を聞きたいのだ

——道、にございますか

改めて声の正体の方を見やります。闇の中ぼんやりと浮かんでいるのは目鼻立ちのはっきりしたなかなかの色男。派手な色柄の着流しを粋に着こなすその姿は旅の芸人でございませうか。長身痩軀を更に上回って細い爪楊枝のやうなその男は近くの村までの道を尋ねてきたのでございます。そこはあたくしの実家のあるところでしたのでそれなら、とお供を申し出た次第でありました。

男はよく喋る人間でした。しかしあたくしはあまり喋らない人間でしたから男の話にはあとかへえとか気のない返事をする事でやり過ごしたのです。口の軽い人間は信用ならないというのが信条でした。昔手ひどい目に遭いましたもんで。いえいえ、失礼、それは

また別のお話にございます。

——聞いておるのか

——はあ

——聞いておらぬな

——へえ

流石に男が苛々しているのがわかりましたので、隣を歩くその顔を見てやります。何かこの世のものではないやうな、美しい——うとしか言いやうがないのでございます——美しい光をたたえた瞳がこちらを見つめておりました。

——お主はほんに男か

——どういう意味にございますか

——きちんと三食食っておるか

——貴方に言われとうございせん

——俺よりもずっと細い

——どの口が仰いますか。爪楊枝のやうな瘦躯で

不意にぶつけられた質問があまりにも不躰なものでしたから、あたくしもちよいとむつといたしまして、男の言うことに棘を忍ばせた答えを返してやります。暫くはああ言えばこう言うという状態でしたが、男は一瞬押し黙るところ言いました。

——お主喋れるではないか

その言い方がまた何とも言えぬ、こちらを見下したやうな言い方で。

——貴方に最初声をかけられた時もきちんと応じております。まだまだお若いとお見受けいたしますが、ほんの数刻前のことも忘れてしまわれるやうではこれから先が思いやられます

——若くはない。もう数百の年月を生きておる

人を化かすやうな奴だ、とあたくしはもう口をききませんでした。

村に着きまして、男は礼をひとつ言いました。あたくしはまた、へえといい、自分の家の方へ男に背を向け歩き始めます。しかし数

歩も歩かぬ内に、男の冷たい手がわたくしの腕をいとも容易く絡め取ってしまいました。

――何の御用で御座いましょう

――礼がしたい

――必要御座いません

――それでは俺の気が済まぬ

――貴方があたくしに勝手に付いていらしただけにございませうて
男の制止を振り切り、家の方へ駆け戻ると、木の棒で粗末な戸に
気持ちだけの錠を施します。それからあたくしは男のことなど頭の中
から追い出して、すぐに床に就いたのでした。

翌朝、村のどこにも男の姿はありませんでした。その代わり、うちの戸口の前には小さな狐が丸まって眠っていたのです。面妖なことよ、と思いつながら、霜の降る朝、冷えた表に狐を放置しておくのも良心が痛みますゆえ、家の中に狐を連れ込んだのです。抱きしめたその身体は細く冷たくて御座いました。

火を焚き、飯を炊き、藁の上に寝かせた狐の寝顔を見つめます。動物の表情などわかりませんが狐は安らかな顔をしているやうでした。その足の裏は小さなひっかき傷が沢山付いており、どうやらここまでかなりの距離を歩いてきたやうです。

――しばらくうちでお休み

そう声をかけてやると藁の上の小さな身体がもぞりと動きました。

狐は大人しい生き物でございました。あたくしが奉公から帰ってくると、毎晩必ず藁の上に行儀よく座って待っております。温かではないものの、外敵に晒されることのない部屋の中で狐は体力を回復しているやうでした。

そんなある晩。そう、満月の晩でございます。

以前男と逢った道、今度は前方から見覚えのある着流しが此方へ向かってきます。男は月光に照らされ、その妖美は風をも惑わせておるかのやう。あたくしははっと息を吞みました。

——お久しう御座います

目が合ったことが明らかでしたのでおずおずと申し上げますと、男は怪訝な顔をして答えます。

——今宵は礼をしに参った

——礼など不要と申し上げましたが

——それでは俺の気が収まらぬと申したはずだ
はあ、と呟くも相手にしなければ良い、とあたくしは歩き始めました。男は隣をひたと着いてきます。

男はずっと着いてきます。とうとうあたくしの家に着いてしまいました。まだ隣におります。あたくしは半ば呆れながら戸を開きました。目の前にはあの毛艶の良い凜とした風貌の狐、がいるはずでした。

——いない

ぼつり、言います。狐がいない。いなくなってしまった。あのすました瞳のあの妖美な、狐。

その時隣から聞き覚えのある鳴き声がし、慌てて其方を見やります、とそこにはあの男がいるだけでした。なんと、紛らわしいことを。ふつふつと怒りが沸いてくるのを感じました。礼をすると勝手に付いてきて、挙句人が狼狽しているというのに呑気に狐の物真似をして、からかって。

——何のつもりにございますか、人をからかってそんなに面白うございますか

だらしない着流しの胸元に掴みかかります。男は何も言いません。どうしてあの狐にここまでの未練があるのか、どうして怒りが止められないのか。自分でも全くわかりませんでした、ひとしきりわけのわからないことを喚き立て、時に男の胸に拳を当ててやりま

した。それだけでは到底物足りない気分でしたが、そうするより他なかったのです。あたくしは声ががらになるまで喚き続けました。

——済まなかった。しかし、からかうつもりは毛頭無かったのだあたくしが無言で胸を殴るだけになった頃、男が言いました。あの夜、はじめて聞いたあの声、赤子をあやす柔らかな声。

——俺がその狐なのだ

は。規則的に胸を打っていた手を止めます。男はもう一度、俺が狐なのだと言いました。

——ずっと独りだった。誰か、一緒にいてくれる人が欲しかったのだ。お主なら、と思ってこのひと月ばかり世話になった。騙していて本当にすまない。だが、頼む。俺を傍においてはくれぬか。何でも手伝おう。本当だ。何でもする。お主が望むなら、何でもだ。だから——

狐に抓まれるとはまさにこのことでございませうか、何故だかあたくしは、こくりと頷いてしまったのであります。狐があまりにも切羽詰まっていたからなのか、何なのかはわかりません。ただ、あたくしは茫然としながらも確かに、頷いてしまったのであります。

あれから如何程の時が経ったことでせう。あたくしの横にはいつも派手な着流しを着こなし、月光のやうな美しさの男がおります。男は大層器用でして、炊事洗濯それから農作業、何でもこなせるのです。本人曰く床上手でもあるそうですが、こちらは一生拝見することはないでせう。

古来から満月の夜には不思議な力が宿ると言われております。それが嘘か真かは存じませぬが、どうか貴方も月夜にはお気をつけなさいまし。面妖な狐が貴方を捕えて、二度と離してはくれぬかもしれないのですから。

(後書き)

必死で落語風になるように書きましたがしっぱいしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4370p/>

妖狐物語

2010年12月11日19時40分発行